

## 3つのキーワードで知る

みづたに あいに  
**水谷 愛子**

(1924～2005)

《椿》1995年  
(後期のみ展示)



- 1924年 広島市に生まれる。
- 1944年 (20才) 女子美術専門学校(現・女子美術大学)を卒業。
- 1949年 (25才) 同郷の画家・山中雪人と結婚。横浜に新居を構える。  
中島清之に師事。きよし
- 1951年 (27才) 月岡榮貴の紹介で、前田青邨に師事。つきおか えいき まえだ せいそん
- 1955年 (31才) 第40回院展で初入選。
- 1966年 (42才) 第51回院展に《奈良の家(A)》(呉市立美術館所蔵)を出品、奨励賞を受賞。
- 1969年 (45才) 第24回春季展(春の院展の前身)に《奈良の家(B)》(呉市立美術館所蔵)を出品、奨励賞を受賞。以後も院展を中心に受賞を重ねる。
- 1987年 (63才) 第72回院展で日本美術院賞(大観賞)を受賞。第74回、第75回院展でも同賞を受賞する。
- 2000年 (76才) 日本美術院同人に推挙される。
- 2001年 (77才) 日本橋三越本店、福屋広島八丁堀店で「山中雪人・水谷愛子・山中本土 三人展」を開催。
- 2005年 3月、死去。80才。呉市立美術館で「山中雪人・水谷愛子 二人展」(10月8日～11月23日)が開催される。

### 参考文献

- 『山中雪人・水谷愛子 二人展』図録 呉市立美術館 2005年  
水谷愛子編『水谷愛子 自選画集』大塚巧藝社 1996年  
『デフォルメされた描線・水谷愛子展』図録 日本橋三越他 1996年

## 観察眼

水谷は幼少期から絵を描くことが好きで、身の周りのものを一日中写生していたそうです。描くたびに対象から何かを発見し、納得するまで同じ主題を何度も描き続け、その過程で得られた新たな発想により一つのテーマを掘り下げながら創作につなげていきました。

後期に展示する花を描いた三枚のデッサンでは、その優れた観察眼を垣間見ることができます。花の形の特徴をしっかりと捉え、細かな線で丁寧に描かれています。

## 色彩

水谷は「色は自分にとってとても重要で、色をつけなければ気持ちが納まらない。」と言っていました。特に好きだった色が赤・白・緑の三色です。水谷の作品を見てみると、確かにこの三色が多く使われており、明るい画面になっています。この三色は抽象化された背景の中で主題を引き立たせる役割を果たしています。後期に展示する《チューリップ》では、花の赤色と、茎や葉の緑の対比が鮮やかで、丸みを帯びた花の形を際立たせています。

## 家族

水谷の創作活動は、家族に支えられてきました。夫の山中雪人は同郷の日本画家です。結婚後に横浜に居を移し、水谷は約30年間市立中学校に勤めながら、子育てと作家活動を両立させました。三度の日本美術院賞を受賞し、夫婦そろって日本美術院の同人となったことは、初めての快挙でした。そんな二人をみて育った息子も東京芸術大学日本画科で学び、自宅は家族三人のアトリエでした。

また、家族は水谷にとって重要な作品の主題でもありました。孫が生まれてから水谷は、幼児や子どもを主題とした作品を多く描き、三度の日本美術院賞の受賞へとつながりました。

創作の環境と創作の主題、その両面で、家族は水谷にとってなくてはならない存在でした。